

信 毎 俳 壇

坊城 俊樹 選

- 隙間より風の遣ひの来てをりぬ
(埼玉東美里町) 川崎 彰典
- 大陸の風の匂ひや時雨来る
(長野市) 宮沢 信博
- 開け放つ天の岩戸や神の留守
(長野市) 白鳥 寛山
- 玻璃に咲く幾何学といふ霜の花
(飯田市) 太石 昭重
- 補聴器の奏つ低音虎落笛
(中野市) 芋川 菊水
- 鹿島櫓かくありたしと冬の朝
(長野市) 福沢健太郎
- 焼芋を折つて大きい方は妻
(立科町) 村田 実
- 石段に猫目を細め日向ぼこ
(佐久市) 町田ゆかり
- 自転車の前に後に冬菜かな
(長野市) 松本れい子
- 着ぶくれて予防接種に脱がさるる
(箕輪町) 松沢 陸
- 佳作
- 父の影少し遅れて七五三
(松本市) 伊藤 和夫
- 裸木のしづかに挑む虚空かな
(東御市) 渡辺美保子

一句目、隙間風のこと。しかしこういう言い回しだと物語が生まれる。風神の仕業なのであろう。二句目、時雨という雨はどこか局所的だと思っていたが、実は大陸のにおいを伴った季節変遷の雨であつたのか。三句目、天の岩戸は天照大神が隠れた所。それを開け放つのは、もろもろの神たちが出雲へ行ってしまふ間に。二つの童話のようなストーリーが混在する壮大なロマンに彩られた句。

今井 聖 選

- 小雪の鰻二串土産に
(松本市) 伊藤 和夫
- 大根干す見た目良くて母の声
(須坂市) 丸山 英子
- 信金に負けじと農協菊展示
(長野市) 青木 武明
- 談合も鰻手短か暮早し
(辰野町) 矢島あさ子
- 気風や水面妖精踊るごと
(大桑村) 木戸口信幸
- 〇脚の雪の足跡母帰る
(長野市) 宮沢 信博
- 水漬や男の見導るショーウィンドー
(長野市) 萩原 宏祐
- 覚悟して手放す車老いの秋
(長野市) 宮沢 義親
- 飲み干せし母の底冬来る
(須坂市) 富田 孝弘
- 八ヶ岳の頂き白し蒲団干す
(小海町) 依田 久代
- 佳作
- 山眠る発電パネルの反射光
(松本市) 中村 百仙
- 集めたる落葉に混じる蝶の翅
(長野市) 小日向孝子

一句目、小雪は二十四節気の一つ。11月下旬に当たる。鰻は土用の丑の日になんで夏の季語となっているが、冬に備えるエネルギーの補給の意図で作者は用いている。二句目、母は大根の干し方にまで美意識を生かす。お洒落な母である。三句目、信金に負けじと農協がけきを飛ばした。菊戦争である。四句目、鰻が集まって鳴いているがすぐに解散する。政治家の談合は如何なものか。

神野 紗希 選

- ミドリガメ東子に磨く年用意
(長野市) 萩原 宏祐
- 夜更かしのシュートレン薄く切るつもり
(松本市) 久我 綺乃
- 翅閉じし骸を包むまろき露
(佐久市) 赤岡 厚子
- 本に指挟んで眠る炬燵かな
(松川村) 岡 豊村
- 箸のチーズ剥がす箸なりクリスマス
(小諸市) 加藤 陽介
- 時雨虹潜らむとして早足に
(飯綱町) 小林 紀子
- 落葉この終りのはじめ降るや降る
(長野市) 武田 芳子
- 熊除けの鈴の音寒しランドセル
(安曇野市) 加藤 文入
- 寒暑接眼レンズ曇りたり
(佐久市) 高岡 満明
- ガザの子よオリオンの下生きてあれ
(宮田村) 金本 牧子
- 佳作
- 久方の空の青さや山湧ゆる
(佐久市) 柏木 利晴
- 松本城影長くして冬近し
(塩尻市) 島津 文雄

一句目、新年を迎える用意もさまざまあるが、ミドリガメを洗うとは楽しい驚きだ。「磨く」の一語に心がこもり、命への慈愛が光る。二句目、クリスマスのシュートレンは、スライスして少しずついただくお菓子。夜更けの小腹(と仄かな寂しさを、素朴な甘みが満たしてくれるだろう。三句目、翅をちゃんと畳んで一生を終えた昆虫を、露の雫がまろやかに優しく包む。小さな生を静かに輝かせた。